

穴井委員長年頭あいさつ

新年あけましておめでとうございます。

昨年も組合員・ご家族の皆様より、国労博多地区本部へのご支援とご協力を頂き誠にありがとうございました。長きに渡る新型コロナウイルスの感染拡大と原油高騰による物価上昇で、私たちの生活、労働環境は大きく変わりました。感染拡大防止の為、社員間の飲み会や旅行は自粛を余儀なくされ、会社はコロナ感染拡大と自然災害による大幅減収を理由に、三期連続で一時金の大幅カットを行い、業務効率化による要員削減、減便、廃止で利用者にも更なる不便をかけ、安全性が脅かされようとしています。また会社の将来に不安を感じた多くの若い社員が職場をあとにしました。私たちはこのような弱い立場の社員や交通弱者が犠牲となる労働環境と鉄道の安全、利便性を向上していく運動を展開していかなければなりません。今年も国労博多地区本部は、利用者の安全性と利便性軽視の業務効率化には反対し、現場で働く社員がモチベーションアップのできる一時金回復と大幅賃上げ、働きやすい労働環境の向上、社員とご家族の生活向上を目指す闘いを展開していきます。そしてコロナ感染が一日でも早く収束をし、コロナ前の明るい日常生活に戻る事を願い新年のご挨拶と致します。

共に頑張りましょう！

2022年元旦



青年のひとりごと

「社会的な手抜き」（リングルマン効果）という心理学用語があります。これは、「集団で共同作業をするとき、作業に関わる人数が増えるほど手を抜きやすくなる」という現象、つまり「自分一人くらい怠けても、全体の利益には大して影響しないだろう」と考える人間の性を指す概念で、合唱における「ロパク」などその最たるものです。一般的に、「みんなで力を合わせて頑張ろう」と聞くと、多くの人が「心強さ」を感じますが、その本音は大抵の場合、「みんながいるから自分は楽ができる」というものです。このとき、確かに、自分が何か思考したり行動したりしなくても、全体として上手く回っているような気がするため、時として一種の「万能感」さえ覚えます。しかし、この考えには致命的とも言える落とし穴があります。「楽」をするためには、その前提として、「みんなと同じ」である必要があります。これは、組織に何か問題があっても、それを指摘することすら出来ず、常に「みんな」が何と言っているか、どう行動しているかを気にしながら自分の生き方を決めなければならないことを意味します。彼らにとって重要なのは、周囲の人間からどう思われるかという卑近な問題のみで、社会や組織のあり方にはまるで無関心。そして、何より恐れているのは、「みんな」と違う言動を取り、そのことで「一個人」としての追求を受けることです。現代社会において人権の尊重が声高に叫ばれていますが、「個」の埋没のためにこれほど必死になるのは、その風潮とは明らかに逆行しています。「自由からの逃走」（by エーリヒ・フロム）とはまさにこのこと。「あれこれ考えず、とにかく『上』に従いなさい」という全体主義で動く組織は、このような人間の特性を熟知していると言えます。もっとも、過労死問題やデータ改竄等の企業による不祥事は、こうした組織体質が生んだ悲劇と言うほかありません。

○当面する行動

1月24日（月）16:00～/県交運合同幹事会 ANAクラウンホテルプラザ2F

1月30日（日）11:00～/組織・交通合同対策会議 博多地区本部事務所